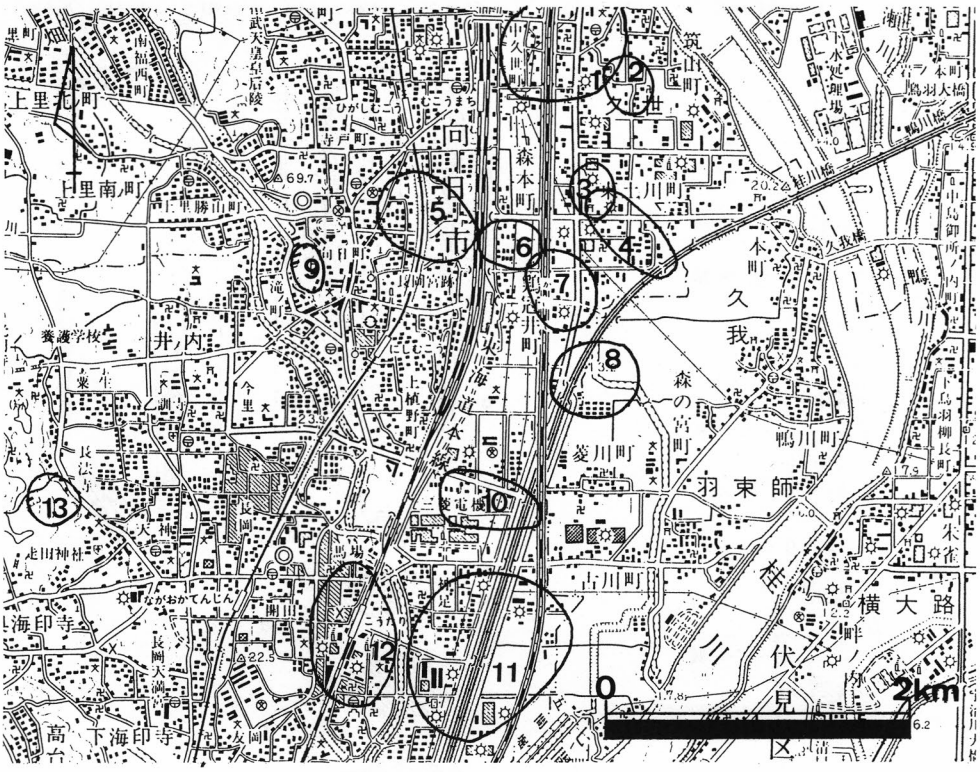
銅剣形石剣に関する２、３の問題点

―京都府出土資料を中心に―

中川和哉

１．はじめに

銅剣形石剣は、青銅製の剣を模倣したものという位置付けがなされ[注1]、近畿地方に多く分布している。そのほとんどが、粘板岩や頁岩(以下、両方を称して泥質岩[注2]と呼ぶ)等の薄く板状に剥離する性質を持つ岩石を用い、周辺の形を整え、研磨することによって作られている。



第１図　主要弥生時代遺跡分布図

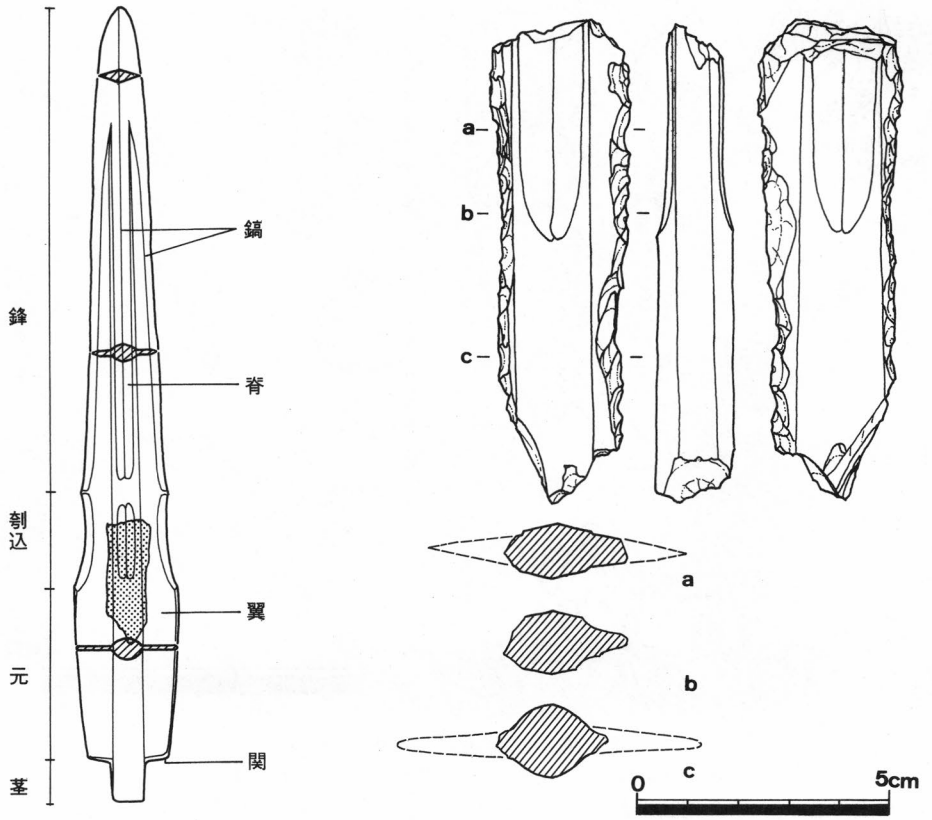
1.中久世遺跡　2.大藪遺跡　3.東土川西遺跡　4.東土川遺跡　5.森本遺跡
6.石田遺跡　7.鶏冠井遺跡　8.鶏冠井清水遺跡　9.北山遺跡　10.鴨田遺跡
11.神足遺跡　12.雲宮遺跡　13.谷山遺跡

1994年の東土川遺跡(長岡京跡左京第305調査[注3])で、これまで発見されてきたものとは、形式的に全く異なる銅剣形石剣が出土した。調査地の所在は、京都市南区久世東土川である。この調査区および周辺からは、方形周溝墓、環濠と考えられる「Ｖ」字溝、農工具や高杯と言った木器類や、畿内Ⅲ～Ⅳ様式を主体とする土器群を検出している。

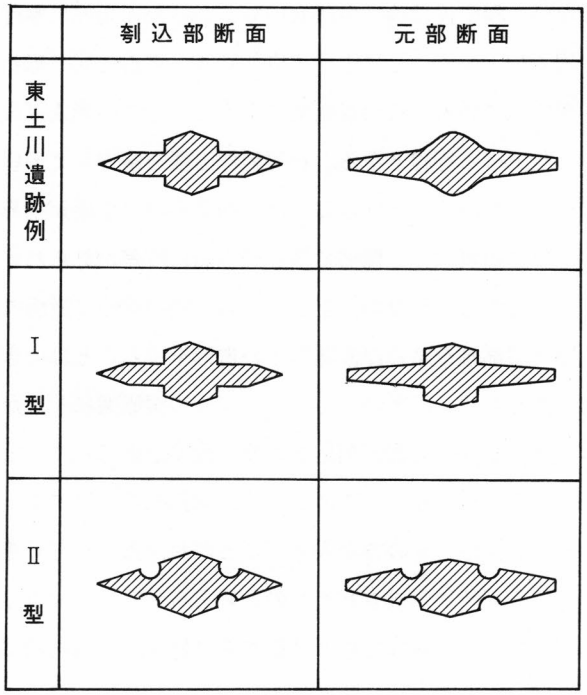
近接する弥生時代の遺跡としては、東土川西遺跡・中久世遺跡・鶏冠井遺跡・石田遺跡・森本遺跡[注4]があげられる。東土川西遺跡[注5]・中久世遺跡[注6]では、中期の弥生土器のほか鉄剣形の磨製石剣が出土している。大量の銅剣形石剣と未成品が出土した神足遺跡[注7]は、直線距離で３kmである。新型式の東土川遺跡出土の銅剣形石剣を手がかりとして、京都府下出土の銅剣形石剣の例を瞥見し、銅剣形石剣について２、３考えてみたい。

２．東土川遺跡出土石剣の検討

第２図に示した石剣は、中世素掘り溝の埋土中から出土した。溝の検出面下層には、弥生時代中期前半を上限とする沼状遺構が広がり、多くの木製品が出土した。石器に用いられた石材は、やや青みがかった灰色を呈する泥質岩である。石剣は破損しており、元部と



第２図　東土川遺跡出土銅剣形石剣とその復原図



第３図　銅剣形石剣断面模式図

刳込部の脊および翼部分の一部が残存している。元部の脊は円柱状に仕上げられ翼は平らな面をなしている。刳込部に当たる部分から鎬が生じ、銅剣が忠実に模倣されている。破損面の風化は、残存する石器面の風化と同様であり、ほぼ同一時期に形成されたものと考えられる。なかでも翼部の破損面は、両面から幾度も打撃を加えることによって壊された形跡が認められる。先端部方向および茎方向の破損面は折れ面の形状を呈し、翼部と比べて破損状況が異なっている。研磨された面は非常にていねいな加工が施され、察痕等は肉眼的にはほとんど認められない。

この新型式の銅剣形石剣を、その他の型式の銅剣形石剣と比べてみたい。これまで認められている型式を踏襲して(注8)、翼部が平坦面をなすものをⅠ型、「U」字状の溝によって翼を表わしたⅡ型、断面が菱形になり中央にしか鎬が認められないものをⅢ型とする。第３図に東土川遺跡出土の銅剣形石剣、Ⅰ型銅剣形石剣、Ⅱ型銅剣形石剣の刳込部と元部の断面形を模式的に提示した。刳込部の断面を見ると、東土川遺跡出土の銅剣形石剣、Ⅰ型銅剣形石剣は翼部分が平らに加工されているが、Ⅱ型の断面では、U字状の溝によって脊部が作り出されており、技術的な違いが認められる。形状の共通する東土川遺跡出土の銅剣形石剣、Ⅰ型銅剣形石剣の元部を断面形で対比すると、東土川遺跡出土の銅剣形石剣例には、鎬がなく丸い脊であるのに対して、Ⅰ型銅剣形石剣は元部全域にわたって鎬が認められる。

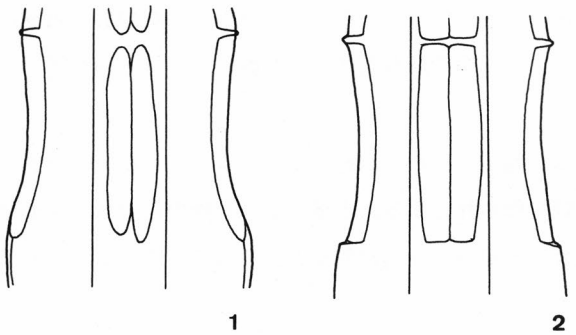
Ⅰ型銅剣形石剣、Ⅱ型銅剣形石剣は、粗加工された石材を研磨によって、断面が菱形になるよう全体の形状を整える行程を経て作られている。Ⅰ型およびⅡ型の石剣は、翼部分の形状を作り出す前にすでに製作工程上の問題から鎬が形成されている。その結果、元部にも鎬が認められる。

東土川遺跡例の鎬を観察してみたい。石剣の元部は、脊が円く仕上げられ鎬は認められ

ない。種定氏は論文中において、いったん元部に製作工程上鎬が形成されるが、後に鎬を円く加工することによって取り除き、銅剣と同じ形状を呈する未知の型式（０式）の存在を想定している。氏の復原案[注9]によると、刃部の形成以後に脊に生じた鎬を、研磨によって円く仕上げる行程となる。石器制作工程を優先して形状を銅剣に近付けている。このように断面形を円く仕上げることは、神足遺跡のⅠ型銅剣形石剣（第５図15）の茎の例にも見られる。この例では、関部で茎と脊の間に段差が見られる。剣の形態を作り出すために断面が菱形になるような加工をしたため、鎬の部分に断面の最大厚が来ることとなる。その結果、鎬と刃部端を結んだ直線以上の造形をすることはできない。この直線に接するように円弧を描くため、段差が生じる。種定氏の復原案にしたがうと、必ず元部の厚みが刳込部と比べ薄くなり、元部と刳込部の間に段差が生じることとなる。東土川遺跡の例では、全く段差が認められない。このことは、刳込部の研磨によってできる鎬と刃部端を結んだ菱形よりも、元部の脊の方が大きいことがわかる。脊部分を円く仕上げ、後に刃部を形成する時に鎬も同時に形成されたものと考えられる。このような刃部の形成の方法は、Ⅰ・Ⅱ式の銅剣形石剣の製作工程とは根本的に異なる。銅剣鋳型と製品から復元される銅剣の研ぎ方と同じである。

また銅剣の場合、刳込部の鎬を形成する研ぎ出し面の形状が、第４図にみられるように１の丸く収まるタイプと２の直線的に終わるものがある。吉田広[注10]は、研ぎ出し面の端部の形状と、刳込面下端の刃部の研ぎ出し面の形状に相関性があることを明らかにし、１と２が型式的に分かれると述べている。丸く収まるタイプの研ぎ出し面を持つ銅剣は、刃部の研ぎ出し面が元部から段差を持つことなくはじまる。直線的に終わるものは、元部と研ぎ出し面とに段差が認められる。

東土川遺跡出土例の場合、刳込部の鎬の研ぎ出し面端部の形状は、丸く収まるタイプであるから、銅剣の例を引くならば、刃部の研ぎ出し面が元部から段差を持つことなくはじまると想定できる。Ⅰ・Ⅱ式の銅剣形石剣の場合、刳込刃部の鎬の研ぎ出し面端部の形状は元部と段差が認められるもので、くり込部分と元部の境に当たる脊上に、直線上の区切りが認められる。銅剣の例から考えると、脊部の直線状の沈線は、第４図の２にあたり、刳込部の鎬を形



第４図　刳込部鍋模式図（1993吉田、改変）

成する研ぎ出し面の形状が、直線的に終わるのを表現したものと考えられる。このことから、東土川遺跡出土例とⅠ・Ⅱ式の銅剣形石剣とは、祖型となる銅剣が異なっていたことがわかる。

東土川遺跡出土例の鎬は、刃部の形成と共にできるものであるから、研ぎ出し面の傾斜を延長することによって、本来の銅剣形石剣の幅を復元することができる。東土川遺跡出土例を復元すると、刳込の幅が約５cm、元部が約６cmとなる。刃部の研ぎ方によっては、刃部端付近で若干のアールを描くこともあるので、やや幅が小さくなる可能性があるが、法量的には、中細型銅剣と同じぐらいであると復元できる。

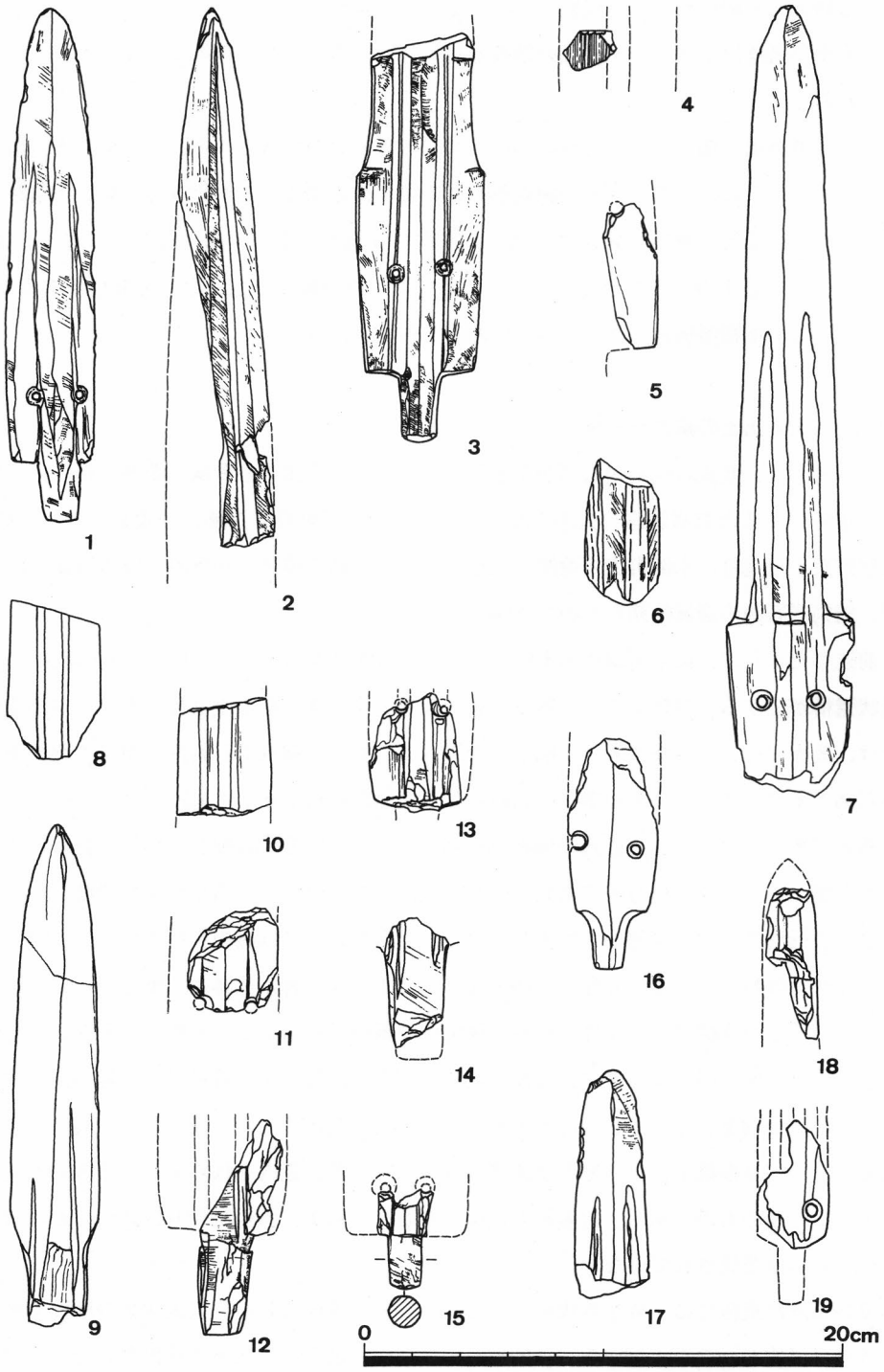
３．京都府出土の銅剣形石剣

京都府でⅠ、Ⅱ式の銅剣形石剣が出土した遺跡には、宮津市日置塚谷遺跡[注11]、福知山市観音寺遺跡[注12]、舞鶴市志高遺跡[注13]、久美浜町芦原遺跡[注14]、夜久野町日置遺跡[注15]、長岡京市神足遺跡、京都市東土川遺跡、木津町大畠遺跡[注16]、八幡市金右衛門垣内遺跡[注17]、笠置町笠置山遺跡[注18]があるが、銅剣形石剣の帰属時期が不明な遺跡も多い。

前述したように、東土川遺跡出土例は、中世の溝溝群から出土している。その直下には、沼状遺構が広がる。遺構出土の土器は、畿内Ⅱ様式が上限となる土器群である。遺跡全体では、畿内Ⅳ様式の遺構が多い。図示した以外に、Ⅱ式の銅剣形石剣片、型式不明の銅剣形石剣の峯部、茎に数カ所の穿孔の認められる鉄剣形石剣が東土川遺跡で出土している。

神足遺跡からはⅠ、Ⅱ、Ⅲ式の銅剣形石剣が出土している。破損品の他に、打撃によって成形加工された銅剣形石剣の未製品も同時に出土している。長岡京市神足遺跡のⅠ型石剣は、方形周溝墓の周溝部から出土しているが、土器の中には畿内Ⅳ様式のものも含まれており時期は特定できないと聞く。種定氏が言うような、神足遺跡のⅠ型石剣がⅡ様式にさかのぼるという根拠は、希薄である。種定氏が銅剣形石剣Ⅰ型と分類した瓜生堂[注19]、亀井[注20]、山賀[注21]、星ヶ丘西[注22]、四ツ池[注23]、池上[注24]、加茂[注25]、川島[注26]、鰐石[注27]、山添[注28]と新出資料である森小路[注29]の例の内、多くは畿内Ⅲ～Ⅳ様式を中心とする中期の遺物と共伴するか、帰属時期不明の遺物である。唯一、島根県浜田市の鰐石遺跡例のみが、弥生時代畿内Ⅰ様式末からⅡ様式初頭に平行する時期のものである。近畿地方に関する限り、確実に弥生時代Ⅱ様式にさかのぼる銅剣形石器は発見されていない。

舞鶴市志高遺跡では、弥生時代畿内Ⅳ様式併行期の直径約８m竪穴式住居の床面で検出できた直径約30cmの小土坑から、銅剣形石剣Ⅱ型が半截された状況で検出された。土坑の検出面上面からは、台石が水平に置かれた状態で検出されており、土坑と竪穴式住居址の同時期性がわかる。



第５図　京都府下出土の銅剣形石剣（各報告書等による）

1.観音寺遺跡　2～6.志高遺跡　7.日置塚谷遺跡　8.芦原遺跡　9～16.神足遺跡
17.笠置山遺跡　18・19.大畠遺跡

銅剣形石剣自体を観察すると、刳込部を作る時に脊部に砥石のあたった部分が観察できる。擦痕の切り合い関係から、鎬よりも刳込部が後に作られている。

これらから、銅剣形石剣の伝世の可能性は禁じ得ないが、少なくとも廃棄時期は畿内Ⅳ様式併行期になり、Ⅰ、Ⅱ式とも共存あるいは比較的近い時期に存在していたことが想定できる。ⅠからⅡという型式的変遷が可能であるならば、比較的短期間に変化したとも予測できる。

４．銅剣形石器の生産

前述したように、銅剣形石剣の多くは泥質岩を素材としている。ここでいう泥質岩は、いわゆる北陸地方で見られるような硬質の頁岩は含まず、板状に剥離するものをいう。神足遺跡においては銅剣形石剣の製品だけではなく、未製品が出土している。同時に、同じ原石と考えられる泥質岩の剥片や石庖丁の未製品も出土していることから、銅剣形石剣を含む磨製石器製作が行なわれていたことは明らかである。東土川遺跡では、泥質岩の剥片が出土している。銅剣形石剣の未製品はこれまでのところ検出していないが、磨製石器の生産は行なわれていたと考えられる。

銅剣形石剣の場合について、西口陽一氏は論文[注30]で滋賀県阿弥陀山の「高島石」が供給されたと論じているが、そのような証拠は果たしてあるのであろうか。産出する地域が狭い原石と、広域に分布する石材に分け原石の使い方を見ていきたい。スポット的な産出状態を示す原産地の石を利用する場合、例えば二上山のサヌカイトの場合[注31]、未製品、剥片、石核の比率の高い遺跡を原石地周辺に認めることができる。弥生時代においても大阪府中谷遺跡に代表されるように、打製の石槍の製作址等が見られる。また、弥生時代より古いが、時期の特定には諸説がある、佐賀県多久市の安山岩産地[注32]の遺跡では、大形の石槍の集中的な生産が認められる。このように大形の石器を作る場合には、原産地周辺であらかたの加工をしている。これは大形の石器の場合、重くて大きな石材を運んだ後に失敗するという愚をなくすためにも、石の豊富なエリアで加工するのであろう。

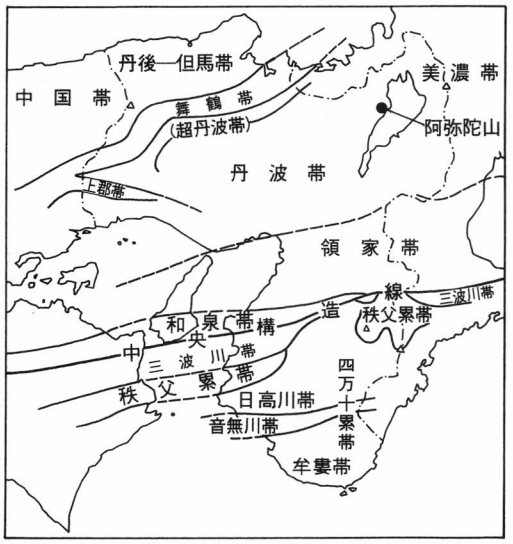
寡聞にしてこれまでのところ滋賀県の琵琶湖西部において、泥質岩の荒割加工や未製品の多くでた遺跡の例を知らない。また製品である銅剣形石剣や石庖丁の類が、滋賀県において特別に多いといったことも認められない。筆者自身は、湖東部の米原町で発掘調査に何回か参加させていただいたが、むしろ磨製石器は山城地域などに比べると少ないといった印象を持つ。

それでは、比較的広い範囲に産出するチャートの場合を見ていきたい。近畿地方では、チャートは丹波帯に産出し、円礫として大阪層群や沖積層にも含まれている[注33]。チャートの

場合も西口氏によって、一元的供給が縄文時代草創期の有舌尖頭器の場合に想定されている。しかし、有舌尖頭器は印象としてチャートで作られたものが多いと感じるが、その実態は三重県のチャート地帯を除くと近畿中枢部では、ほとんどサヌカイト製であり、チャートによる本格的な一元生産体制と言えるのであろうか。チャート産出地に位置する兵庫県国領遺跡[注34]において、縄文時代草創期の石槍がチャートから製作されている。同じく丹波地域の春日七日市遺跡[注35]では、チャート製の有舌尖頭器が出土しているが、その下層からは礫層中に含まれるチャートを利用した旧石器時代の遺跡が広がる。わざわざ遺跡内にあるチャートを、滋賀県から入手したとは考えられない。また、三重県では旧石器時代[注36]から現地のチャートを多く利用している、後世には火打ち石の産地となったと聞く[注37]。弥生時代とは生産体制や社会の到達段階が異なっているため一概に論じることはできないが、チャート地帯では入手可能なところで多元的に石器生産が行なわれていることがわかる。

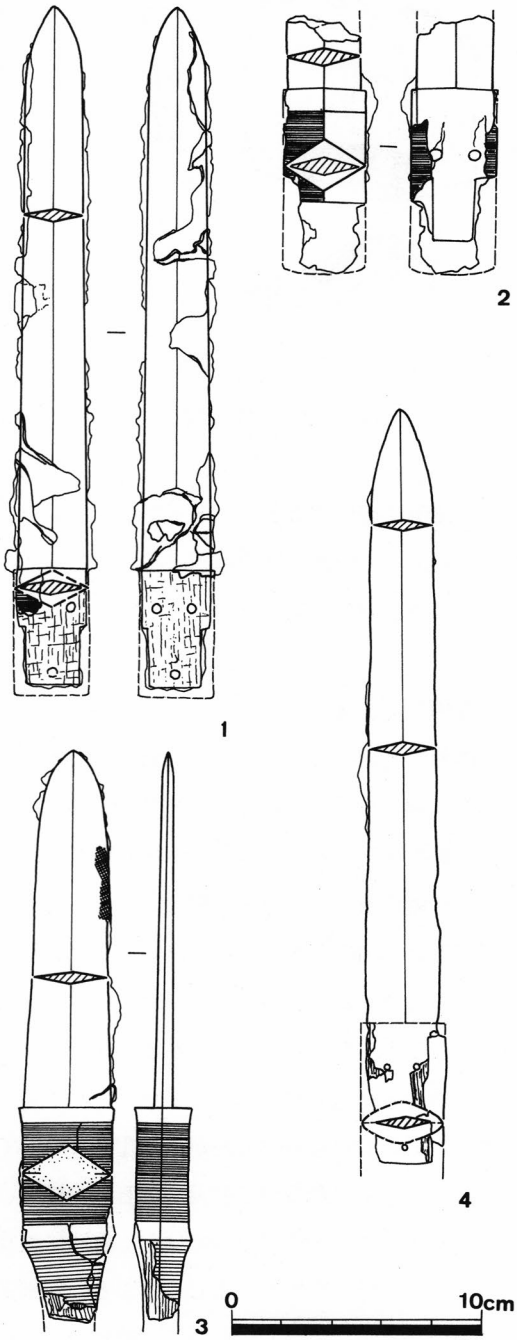
泥質岩の場合はどうであろうか、山城近郊の遺跡で見てみたい。亀岡市太田遺跡[注38]は丹波帯に位置するⅠ～Ⅱ様式の弥生時代の遺跡である。田代弘氏は、太田遺跡の出土資料に基付いた、詳細な磨製石庖丁の製作工程を復元してる。分析によると、在地の露頭付近から１キログラム前後の泥質岩の亜角礫を、遺跡持ち込み加工している。原石および剥片には灰白色のものと黒色のものが見られる。

長岡京市に所在するⅠ様式の遺跡である雲宮遺跡[注39]の環濠から出土した泥質岩製の剥片の自然面を観察すると、楕円形を呈する水磨を受けた円礫であることがわかる。このような円礫は、在地の礫層中から引き抜くことが可能である。種定氏[注40]は、銅剣形石剣を観察すると「摂津の淀川流域から播磨の明石川流域にかけては主に灰白色系泥質岩、日本海沿岸部では主に黒色系泥質岩、河内ではラミナ状の縞目が入った暗灰色系泥質岩が選択されている･･･」と述べ、泥質岩の一元的供給の可能性が低いことを示唆している。神足遺跡の泥質岩はまさしく灰あるいは灰白色系泥質岩であり、この地域の特徴を示している。ある機会に現地事務所に弥生の研究者が集ったが、筆者自身が東土川遺跡内の礫層中から引き抜いた灰白色系泥質岩を研磨して作った石庖丁をみて「「高島石」がある」といった人たちがいた。

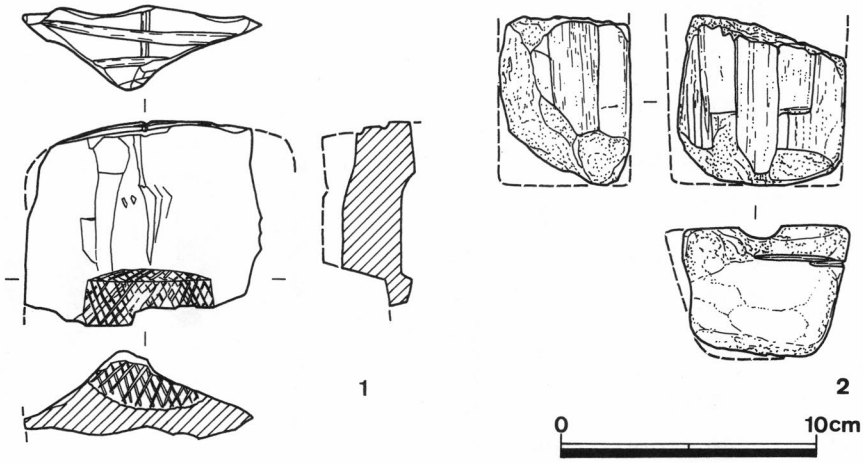


第６図　近畿地方の地質構造区分(1995　井上)

硬質できめの細かい泥質岩は、いわゆる「高島石」らしい。弥生の研究者の間でも「高島石」に対する認識が異なっている。種定氏が言うように黒色の泥質岩が「高島石」であるならば、「高島石」は近畿中央部では、銅剣形石剣の素材としてほとんど用いられていないことになる。また、「高島石」は阿弥陀山以外にも鴨川以北の餐庭野縁辺の硯谷や藺生にも産すると指摘(注41)されているように黒色泥質岩の産地自体の特定が怪しくなっている。丹波帯のように広域に分布する泥質岩産地は、変成の度合いによって様々な状態のものがあると思われる。また、石の色は泥として堆積した時の炭化物の含有量によって左右され、絶対的な分類とはならない。一般的に石材を産出するということが、その石が利用されていたという保障にはならない。石材の産出地として、現在は知られていても石器に用いられていない露頭も存在しているし、水没や山崩れといった原因で現在は人目に触れないあるいはなくなってしまった原産地もあるであろう。また、硯を生産していたときに、産地として利用されていたからといって弥生時代にまでさかのぼる保障には全くならない。少なくとも原産地遺跡が発見されなければならない。以上のように検討し



第７図　関部に穿孔された鉄剣(1993　川越。一部改変)
1・2.門田北遺跡　　3・4.立岩堀田遺跡



第８図　青銅器鋳型(1.鶏冠井遺跡　2.田能遺跡)　(1983　山中、1982　尼崎市教育委員会)

ていくと実態のわからない「高島石」といった名称は、混乱を回避するためにも廃絶すべきである。

同じ丹波帯に産出するチャートと同様、広域のゾーンで産出する泥質岩は、銅剣形石剣の素材として、一元的な供給体制は認めがたく、むしろできる限り近接した産地から石材を得ていることが想定される。

５．着柄の可能性

Ⅰ型銅剣形石剣のモデルとなった銅剣は、元部に刃が付けられてないという共通性を重視すると、細形銅剣Ⅰ型あるいは中細形銅剣であると考えられている。東土川遺跡例は、刳込部の幅の復原から考えると、中細形銅剣を模したものとなる。

近畿から瀬戸内、山陰地方の細形銅剣は、元部の翼に脊をはさみ一対の穿孔が施されている例が多い。剣把に茎を差し込み剣を装着する北九州地域とは、着柄方法が異なっていたことが指摘できる[注42]。このような一対の穿孔が施されている例は、中細形銅剣や銅剣形石剣に共通してよく見られる特徴である。銅剣は、鋳造によって成形されたのち、最終工程として翼部から穿孔される。オリジナルである銅剣の場合、穿孔は着柄の必要性から施されたが、銅剣形石剣も制作方法が簡略化していってもなお穿孔することから着柄されてものであろう。瓜生堂遺跡のⅠ型銅剣形石剣の場合、例外的に３箇所の穿孔が見られ、孔を２箇所にあけることをまねたのではなく着柄に執着していることがわかる。

一歩踏み込んで空想をたくましくすると、銅剣形石剣の初めの制作者は、着柄していないときの銅剣を知っているからこそ、着柄のため同じところに穿孔した。そして、銅剣形石剣も制作方法が簡略化しても穿孔するのは、着柄する必要があるのに、いつでも非着柄

状態が見られたことになる。銅剣の使用時(まつり？)にのみ着柄したのではないだろうか。そのため、元部の翼に脊をはさみ一対の穿孔が施されている銅剣の着装例や、鉄器などに見られる着柄痕跡が認められないのかも知れない。

鉄剣[注43]の中にも関部上方に一対の穿孔がされた例がある。この穿孔例の多くは、銅剣を模したとされる茎が短い短剣である。この型式の鉄剣の着柄方法は第７図に見られるように、木柄が関より２～３cm剣身側に入り、断面が紡錘形もしくは菱形を呈し、目釘を通したのち、糸巻きが施されている。細形銅剣Ⅰ型あるいは中細形銅剣は元部に刃部がないことから、鉄剣例のような着柄が行なわれたのかも知れない。このことはもちろん銅剣形石剣にも当てはまる。

また、今回はⅢ型の銅剣形石剣を論じなかったが、形態からは鉄製の関部上方に一対の穿孔があり、茎が短い短剣をまねた可能性も大いに考えられる。

６．小結

まとまりもなく多岐にわたって論じてきたが、銅剣形石剣と銅剣の使用状態の共通性を見つけることが、着装の復原から可能になった。東土川遺跡例の場合、翼を形成し脊を円く仕上げた後に、刃部および鎬が形成される。このような行程は、Ⅰ式やⅡ式の銅剣形石剣のように全体の形を整える研磨行程とともに刃部と鎬を作り出していくのに比べ、より困難で製作に時間がかかる。それにもかかわらずこのような研ぎ方をするのは、銅剣の鋳型から鋳抜かれた状態を知り、かつ、銅剣を研いだことのあるかあるいは研ぎ方を知っている人の手によって銅剣と同じように作られたものである。中細形銅剣が制作されている時期と同じ時期に東土川遺跡例の石剣が生産されたと考えられる。兵庫県田能遺跡[注44]では、中細形銅剣の鋳型が畿内Ⅱ～Ⅲ様式の土器とともに出土しており、近畿地方での国産青銅器の生産が認められる。国産青銅器にたいする需要が増え原材料が欠乏したため、材質は石に変わっても、青銅器製作に係わった人が作り出している。これらのことから、乙訓地域で中細形銅剣の生産されていた可能性が指摘できる。また、東土川遺跡西方約数100mの鶏冠井遺跡からは、菱環鈕式あるいは外縁付鈕Ⅰ式の銅鐸鋳型[注45]がⅡ様式以前の土器と共伴して出土している。田能遺跡の例を考えると、同時期か近い時期に乙訓地域で青銅器生産が行なわれていたことになる。

また、銅剣形石剣の変遷を考えるとき、東土川遺跡例とⅠ式との技術的な違いが大きいだけではなく、刳込部の鎬の研ぎ出し面端部の形状が異なり、模倣した銅剣の違いがあることを明らかにできた。両者の関係については明らかではないが類例の増加を待ちたい。

本稿をまとめるにあたっては、松藤和人氏、種定淳介氏、田代弘氏、野島永氏、國下多

美樹氏、岩田修一氏に多くのご助言を得た。文末に記して礼を申し上げたい。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第４係調査員）

注１　平井　勝　1991　『弥生時代の石器』　ニュー・サイエンス社

注２　頁岩、粘板岩という概念は人によってかなり異なり、多くの場合岩石的な分析によって分類するわけではないので、泥を起源とする変成岩として泥質岩という名称で述べたい。

注３　戸原和人・竹井治雄・中川和哉他　1995　「名神道路関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第61冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター、中川和哉　1993　「銅剣形石剣の新事例」『京都府埋蔵文化財情報』第50号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注４　京都府教育委員会　1985　『京都府遺跡地図』第５冊［第２版］
尼崎市教育委員会　1982　『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告書第15集

注５　竹原一彦　1980　「長岡京跡左京第36次(7ANDII)発掘調査略報」『長岡京』18　長岡京跡発掘調査研究所

注６　吉崎　伸　1990　『中久世遺跡発掘調査概報』平成元年度　京都市文化観光局

注７　長岡京市教育委員会　1980　「長岡第九小学校建設に伴う発掘調査概要　長岡京右京第10・28次調査(7ANMMB地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第５冊　長岡京市埋蔵文化財センター、1988　『神足遺跡　第16次発掘調査略報』長岡京市埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
岩崎　誠　1991　「４弥生時代　神足遺跡」『長岡京市史』資料編１

注８　種定淳介　1990　「銅剣形石剣試論(上)」『考古学研究』第36巻第４号、種定淳介　1990　「銅剣形石剣試論(下)」『考古学研究』第37巻第１号

注９　種定淳介　1992　「銅剣形石剣Ⅰ式の成立とその意義」『究斑』

注10　吉田　広　1993　「銅剣生産の展開」『史林』七十六巻六号

注11　梅原末治　1923　「日置発見ノ石剣」『京都府史蹟勝地調査会報告』第４冊

注12　梅原末治　1922　「西中筋村石剣発見ノ遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第３冊

注13　肥後弘幸・岩松　保・三好博喜他　1989　『志高遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター

注14　梅原末治　1923　「芦原ノ一古墳ト発見ノ石剣」『京都府史蹟勝地調査会報告』第４冊

注15　平良泰久　1974　「日置遺跡出土の有樋式石剣」『京都考古』第２号

注16　松本秀人・常盤井智行　1984　「大畠遺跡の武器形石製品」『京都考古』第31号

注17　八幡市　1986　『八幡史誌』第１巻

注18　荊木美行　1990　「第２章　笠置町略史」『笠置町と笠置山―その歴史と文化―』　笠置町教育委員会

注19　大阪文化財センター　1980　『瓜生堂』

注20　大阪文化財センター　1983　『亀井』

注21　大阪文化財センター　1984　『山賀(３)』

注22　枚方市文化財調査会　1980　「星ヶ丘西遺跡」『枚方市文化財年報』Ⅰ

注23　第２阪和国道内遺跡調査会　1970　『池上・四ツ池』

注24　23と同じ

注25　関西大学　1968　『摂津加茂』

注26　小島隆人・藤田等　1973　「磨製有樋式石剣」『嘉穂地方史』先史編

注27　前島己基　1973　「浜田市鰐石遺跡」『季刊文化財』第22号

注28　岡本健児　1983　「高知県発見の銅剣・銅弋・石剣について」『高知の研究』１地質・考古編

注29　平田洋司　1994　「森小路遺跡の銅剣形石剣」『葦火』50号　(財)大阪市文化財協会

注30　西口陽一　1986　「人・硯・石剣」『考古学研究』第32巻第４号

注31　塚田良道　1990　「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」『古代学研究』第122号

注32　杉原荘介・戸沢充則・安蒜政雄　1983　『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』　明治大学文学部考古学研究室

注33　西口陽一　1991　「近畿有舌尖頭器の研究」『考古学研究』第38巻第１号

注34　村上泰樹・久保弘幸　1991　「国領遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会

注35　久保弘幸・藤田淳　1990　「七日市遺跡(Ⅰ)」兵庫県教育委員会

注36　奥義次・御村精治・大西素行　1985　『上地山遺跡発掘調査報告書』　玉城町教育委員会、三ツ木貞夫・森田尚宏他　1979　『出張遺跡調査報告書』

注37　野口泰子・伊藤正人・水野裕之　1991　「竪三蔵通遺跡―第10次調査の概要―」　名古屋市教育委員会

注38　村尾政人・田代弘他　1986　『京都府遺跡調査報告書第６冊―太田遺跡―』　京都府埋蔵文化財調査研究センター

注39　戸原和人・中川和哉他　1992　「長岡京跡左京第216・241・242次右京第349・357次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第47冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注40　８に同じ

注41　８に同じ

注42　岡内三眞　1989　「青銅の威風と形」『古代史復原５　弥生人の造形』　講談社

注43　川越哲志　1993　『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣出版

注44　尼崎市教育委員会　1982　『多能遺跡発掘調査報告書』

注45　山中　章編　1983　「鶏冠井遺跡第２次発掘調査報告『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集向日市教育委員会、國下多美樹　1994　「鶏冠井銅鐸鋳型の評価をめぐって」(上)、『古代文化』第46巻第７号　國下多美樹　1994　「鶏冠井銅鐸鋳型の評価をめぐって」(下)『古代文化』第46巻第８号、國下多美樹　1994　「山城地域の弥生時代石器」『年報　都城』NO.５　(財)向日市埋蔵文化財センター

参考文献

井上裕弘・木下修他　1978　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第９集　福岡県教育委員会

井上頴纘　1995　「第１章亀岡の自然環境」『新修亀岡市史』本文編第１巻　亀岡市

岩永省三　1986　「剣形祭器」『弥生文化の研究』６
京都府立丹後郷土資料館　1974　『古代のまつりとくらし』
京都府立丹後郷土資料館　1993　『石の考古学』
京都地学会編　1993　『京都の地学図鑑』京都新聞社
立岩遺蹟調査委員会　1977　『立岩遺蹟』河出書房新社
寺沢　薫　1991　「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈』上　筑摩書房
長沼　孝　1986　「磨製石剣・石弋」『弥生文化の研究』９

＊第５図の京都府下の銅剣形石剣の内種定1990にしか掲載されていない図面は種定氏のものを元とした。自ら多くの新たな図化作業を行ない論文を書かれる研究姿勢には頭下がる思いである。